

簡書の伴露

編 文 田 幸

説 彦 利 橋 土

刊 堂 文 弘

1951

目次

明治二十二年	一
明治二十三年	二
明治二十四年	二六
明治二十五年	二九
明治二十六年	四四
明治二十七年	五三
明治二十八年	五五
明治二十九年	六〇
明治三十年	六五

明治三十一年

六七

明治三十三年

七〇

明治三十四年

八〇

明治三十五年

八五

明治三十六年

一〇二

明治三十七年

一二一

明治三十八年

一五七

明治三十九年

二〇七

明治四十年

二二一

明治四十一年

二三三

明治四十二年

二六〇

明治四十三年	二七一
明治四十四年	二七八
明治四十五年(大正元年)	二八六
大正二年	二九三
大正三年	二九八
大正四年	三〇二
大正五年	三〇五
大正七年	三一
大正八年	三一三
大正九年	三一四
大正十年	三一五

大正十一年

三一七

大正十二年

三一九

大正十三年

三二〇

大正十四年

三二三

大正十五年(昭和元年)

三二六

昭和二年

三三〇

昭和三年

三三三

昭和四年

三三六

昭和五年

三四一

昭和六年

三四六

昭和八年

三四七

昭和九年

三五三

昭和十一年

三五五

昭和十二年

三五九

昭和十三年

三六三

昭和十五年

三六五

昭和十六年

三六六

昭和十九年

三六七

宛名索引

三六九

解説

三七五

挿入寫眞
七葉

明治二十二年 己丑

淡島寒月宛〔端書〕

一月二日

謹祝新禧。

野州の邊にて出鱈目の見當を向き三拜。

清川小田依田諸君へお序あらば鶴聲願ふ。

註 露伴は二十三歳。野州へ旅行中の通信で、淡島寒月は本名寶受郎、清川は伊太郎、小田は直太郎、依田は學海か。淡島・清川・小田は友人である。

明治二十三年 庚寅

森鷗外宛（使持参）

一月（推定）

柵草紙たゞ今落手仕候。かねて御話し申せし廣告案文
○二十行より位
かまひ不申候 此ものに御つかはし被
下度、明日小生出社の折持つてまゐるべく候へば。

露 伴

鷗外様

註 當時露伴は讀賣新聞の客員であつた。森鷗外が主宰してゐた雑誌柵草紙の廣告を讀賣新

聞に出す件についてで、一月二十七日號と二月二十七日號の紙上に廣告が出てゐる。

森鷗外宛

唯今御宅より歸り候ところ社の廣告が、よりより此様な事申參り居り候間、これは何卒兄のた
だの人情にて一二部の事故たゞ郵送してやつて下され候はゞ幸甚にごさ候に付、迂生より右御

願申上候。

成行拜

森君 坐下

註 成行は露伴の本名。

内田魯庵宛

〔轉載〕

拜啓。先日は失敬々々。其折御はなし致せし會合は當日雨もよひなりし故、迂生も如何かと存じたる所是非との事、實は迂生は延引と當推量にさつし居り貴兄へ御報道を怠り多罪々々。然るところ同日は閑論どころか、紅、落、寒三先生と迂生と唯四人だけなりしも素より當世才子の座間、諸先生の高徳を慕ひ琥珀に吸はるゝ麈の如き美人麝集したる爲め、文話も俳諧話も臺なしとなり、兎角浮世は第二義諦、其眼付が此そぶりがと、あり難き事のみなりしもおかしく候。歸路風邪につかまへられて、寒月子の腹痛、迂生の咽喉ごろ／＼など、最も風雅のみやげなりき。

拙著「毒朱唇」都の花に掲載せしは「大詩人」一部分に御座候。餘程原書より節略したる故、意を解せざるも多かるべけれど、御一覽なりしならば此次度御面會の幸ありし時御批判御きか

せ被下度候。何か紙上にて御示教あらば尙々幸甚。若夫^{もしそ}的面火鉢さし向ひの攻撃ならば、美人に相伴いたさすべくや、此段伺ひたてまつる、つる／＼つツペツたのきの腹づゝみ、ポッポンのどうぢやいなと、一拳所望いたしたし。オット冗談にあらぬ談しするこそ人は奥ゆかしけれ、ならば眞面目に願ひあげ候。かしこ。

露 頓首

不知庵様

註

紅は尾崎紅葉、落は落花漂絮で中西梅花のこと、寒月子は淡島。小説「毒朱唇」は雑誌都の花の一月號に載つたもので、「大詩人」といふのはその原案の題名であつた。不知庵は

内田魯庵の當時の號。

賀古鶴所宛 〔使持参〕

お珍らしきもの難有頂戴致候。小生風邪既に全快如例ぴん／＼に御坐候。御病氣如何や、御氣分さまでにもおはさずばこゝへ御出なされまじきや。僕少時はこゝに鷗外君の勉強の邪魔をいたし居り候。

露

鶴所様

註 賀古鶴所は鷗外の友人で、露伴とも親しかった。

森鷗外宛
〔使持参〕

昨夜は大失敬。

しゅとうといふを少しさしあげ申候。洗つて後たゞきて酒あるひは酔を少し御加へなされ宜敷御座候。

露伴

鷗外様

註 しゅとうは酒盗といふもので土佐の名産である。

井上通泰宛
〔使持参〕

八雲御抄七冊。

冷水で洗つたやうな腸の中に火よりもあつい心もたばや、と云ふ狂歌を何卒一寸御ほんやく

あそばし、端書にて御教示被下度、これはかし賃になほしていただくのもり也。

成行

通泰大人

註 井上通泰に八雲御抄七冊を貸すのにつけてやつたもので、その通泰の返事らしい歌は、

「冷水でつらを洗つてみたれどもなにの事やらわからざりけり 通泰」といふのである。

坪内逍遙宛

拜啓。其後御無沙汰千萬奉謝候。爰に人ありて瀧澤羅文と申し候迂生近來知面の人に候へど、中々雜書に明るく多くの材を有し候人故つきあひ申候ひしが、然る所同人は今日天地踟躕身の置所なきほど悲しむべき境界に沈淪候。何卒御きゝ被下度、仔細を申さば極めて長く候此譯は迂生も漸く此頃知りたるに候。詰り魯直の君子にて目上の人と争ふあたはず、又人のはかるところに落ちて自らも罪を作りたる結果にて今は自身及び妻とも無法に困りあるにて、財産家なれど之を計るものゝ爲に計りはたさせられたる場合にて、又自ら理のあるところをも争ふを情に於て忍ばざる事情あるより中々一時間も安からず、終に夫妻暫く別れ當人は自立の地をなして罪を補はんとの懺悔に立到り、半分實行して自分だけ我輩を相談相手にいたし候ところ、迂

生宅へ置きてもよろしけれど直近所に彼人敵の親族のありて兎角不任其意、不得已今夜は他の友人宅に置候。甚だ申し兼ねたる義なれど暫時食客に御置き被下間敷や。迂生等より雜書は讀み居り候へば御話しの伽は出來べく候。高田君にも願ひて何卒社末に連ならしめむと考候が、尙兄よりも御心添被下度、偏に奉願候。勿論食料雜用等は誓つて自辨致させべく、當人矢張り文事より外には取り所なきなれば、それについては貴兄御宅の片隅なりともに居りたき願ひ、何卒罪を悔ひ一ト奮發いたさんとの考をめであられ御置被下間敷や。勿論今は茫然となり居りて餘程他所眼にも悲しく、迂生まで其人繼母を恨むの痴に誘ひこまれ申候。何か當人は魯直の上に悲を重ねて夢路辿るやうな舉動、まことに知面の生が身も思ひにあまりてむづ／＼致し候。何卒至急如何か御返事一寸被下度、次第によりては當人參上いたさせ見べく、眞に事は入り込み胸は憤怒に滿たされて前後不ぞろひの文、よく／＼御判讀被下度候。懇願々々。

十三日二時

幸田露伴

坪内大人坐下

註

露伴が坪内逍遙と初めて會つたのは二十二年で、逍遙はその年の五月に本郷眞砂町から大久保余丁町へ移轉した。高田君は讀賣新聞の高田早苗、逍遙はその文學附録の主筆であ

つた。

坪内逍遙宛

拜復。今月來種々雑多の事にて俗世間に交はり候だけ小生がまんの出来ぬ段のみおほくて、よけいな事にでしやばり争鬭と怨恨のみにて日を送り候内、羅文子の件にて不得已貴意に頼み奉り候ところ、早速御親切の御返書唯今拜讀、人間義の爲に動くの大人情と難有感泣仕り候。酔てこそあれ露伴深く奉謝候、ましてや同氏に於ておや。扱仰せ越しの義委細結構至當、たゞたゞ大に咽び申候。實際同氏此所は論に及ばず一すじに悔の後の道を得させたきだけの迂生の願ひ、得たきだけの同人の願ひ、御汲取り被下候段は海山快心嬉しき事に候間、早速同人貴宅へ伺はせべく即ち申し遣はし申候。

今夜種々他の事情ありて昨夜歸宅せず、奔走一日唯今歸宅御手紙を見て、即ち御返答申上候。亂言は例と御免被下度候。閑言多罪。

逍遙大人

露

鈴木天眼宛

〔轉載〕

朶雲飛來、忽然として前生の知己と語るの思ひこれあり候。殊に遠路の所御心にかけさせられ新に長崎みやげ一本賜り難有拜讀候。眼界せまく鞋底いまだ西方の土を踏ざる小生も、御蔭をもつて大波戸場にあがり濱の町通り右へ折れて思案橋、其傍に思ひ切り橋のあるもをかしく、段々と爪先上り病院より招魂社、扱左の坂の下の銷金窩まで手に取る如く承知仕り候。殊に嬉しきは長崎の小歌までの御採集、是れ他日大に入用の者になるべく、又崎陽の言文一致甚だ珍しく膽を驚かし臍を躍らするほど變妙不可思議にて、中々御手數のかゝりし御註釋御苦勞に存じ候。一體同書の記事周到にして平易、まことにやさしく書流されたるばかりにて然も長崎全般の景況眼前に浮び出づるごとくものせられし御筆力、失禮ながら「無巧之中藏大巧」ところにて、隱居老人の隨筆めき平淡老實、慾氣なく氣障なき所感服仕り候。諛辭は申さず、他の御高著と比較候へば氣餒もなく奇趣もなく候へど、此様の書は素よりかくあるべき事至當の譯、却つて水晶ほど角立かじだれべき筆を以て琥珀いまだ凝らざる底の文字と爲せられしは御手際と贊成申し候。但し御書中小生に對し人爵の影法師めきたる文字ありて甚だ氣不甘覺え申候。小生は曾て國民新聞紙上にて現存の人々八箇を撰みて妙な虚爵めきたるものを附したる者のありしを見たる時、厭な事と覺え申候。どちらかと申せば人爵破壊擯斥遠離の方が風流と信じ候。人ありて兄の平生を語りくれ候故かゝる事まで申上候。矢張オイ露伴か責ては「あなた、わたくし」

位の調子で交際が、人間同志なら洒落た事と思ひ候。おぼしめし如何にや。瑣事は扱置き御病中は長崎みやげ、御病後は何か定めしおもしろきものゝ出る事ならんと待居り候。兄も長く霞ばかり喫し居られては頼母しからず、十斤の肉味如何なるべきや、兎も角も御自愛々々々。頓首。

註 長崎の鈴木天眼からその著「長崎みやげ」を贈られた返書である。

尾崎紅葉宛

五月十五日〔轉載〕

都踊りは云ふまでもなくまことに美しく舞妓藝子の玉を聯ねて、京女郎の艷色拙者の眼を驚かし申候ひし。但し是とても長く眺め居り候へば矢張首の骨痛く相成り候ところ人間界の是非もなき義と考へ候。然し又五十人ほどを並べて見るは惜しきもの故一人づゝ交り／＼日就社の編輯室にあげて、彼のしなやかなる手に岐阜團扇持せ、兄をはじめ能く勉強致さるゝ方々の背面より香風を送らせたくとも存じ候ひしが、是は乞食の夢の八百善詮議と辛くもさととり候ひし愚のほど我ながらふびんに候。

鴨の川邊の木屋町と申す所に宿をとり居りしが、夜深で隣樓の三味の音も消かゝりし頃闇をつきぬきて鳥の鳴けるを聞きしに、知る人彼れは千鳥と教へ呉れ候ひけれど、其時わたくし酔